

香港監獄広場

挽歌集

文明という名の 足かせが 自由を縛る

この高い監獄の白い壁の様に 俺たちを 拒(こば)む

俺たちは豊かになるほど 失(うしな)ってゆく 自由闊達な ころを

縛りの中の自由 籠(かご)の中の家族のぬくもり

この鉄の監獄の檻(おり)の中みたいに

それが俺たちが求めていた自由だったのか？ ちっぽけな幸せなのか？

あー 飛び立ちたくとも 飛んでゆけない 鉄の 檻(おり)

いくら手を伸ばしても届かない 鉄の扉が 俺を 縛り付ける

はじめに

香港健康広場より 10月5日(土)

平素は香港健康広場をご信頼いただき誠にありがとうございます

私のアパートの外国籍の家政婦さんが他の飲食店で不法労働して現行犯逮捕され、その雇用主である私も、不法労働ビザ取得に協力したという事で7月17日から4ヶ月、突然刑務所入りとなりました

幸い、行いが良いという事で、本日早めに刑務所から出ることが出来ました

ひとは長い人生で、本人の予期せぬ事態に遭遇する時があるものである

上記の事件が起きたのが6月17日

それから一か月後、雇用主の私も懲役四ヶ月の判決を受けて、7月17日に投獄される結果になった

この82日間の監獄生活の中で実態と共にその環境のもとで考えたこと等を記述してみた

朝の一時間が勝負

刑務所では朝7時起床 夜10時に電気が消えて睡眠となる

例外は許されない

最初は不便だったが、意外とこれが脳の働きには効果的である

むしゃくしゃして、考えがまとまらない時には、早く寝る事だ

すると、考えてもいないのに、朝6時に目が覚めて、答えが出来ている

人間の脳とは、まことに不思議なものである

それと、ほんとに大切な事は、あまりしゃべらない事

すると、心に中に、いろいろな考えが鬱積して、かえって中身の深い回答が出来てくる

刑務所の中では、日本語が通じない

じっと心で感じたことを心に書き留めるしかない

それがかえって、いろいろな作品に昇華する

殆どの歌詞が朝6時近辺にひらめく様に出てくる

これが監獄生活で覚えた一番大きな成果かも知れない

浮間人生一監獄挽歌集

2013年10月14日 編集

No.	作品名		原案作成 日
1	香港監獄広場		7月23日
	282枚の日めくり暦		7月27日
2a	鎖と翼	詩	7月27日
3	かぜのよふに — 道なかばで朽ちても	詩	7月31日
4	孤空の氷道	詩	8月13日
5	ひとりみち		8月16日
6	しあわせくれない		8月29日
7	役者顔 — みちのく玉三郎		8月31日
8	みずほうみふるさと — 俺の大和		9月2日
9	無論如何 — どうなろうとも	中国語	9月5日
10	異国の地で Esperame mi amor	スペイン語	9月5日
11	チンピラ稼業		9月8日
12	きっといいことあるよ		9月11日
13	おとこのゆめ		9月12日
14	咲く桜散る桜		9月12日
15	咲いてナナイチ特攻隊		9月23日
16	はだかでんきゅう 裸電球		9月27日
17	みんな心に傷がある		9月29日
18	最期に		10月2日
19	香港監獄広場 上 — 楽しくも悲しき仲間たち	随筆・推理小説	10月5日
20	香港監獄広場 下 — まわたで作られたトラップ	推理小説	10月5日

メロディーと伴奏をいれて歌にしたものを、現在制作中

私の「生きた証し」として、路傍の石に書き残したい

こんな男がいた事を覚えていてほしい

■今日の命もわからない

明日の家族もわからない

消えてゆく俺の村 家よ 家族よ 愛する人よ

さようなら ふるさと 俺のイスラマバード

人手頼(つた)って来てみたけれど 金も 住み家も 言葉もなくて

今じゃ ここが おいらの ふるさとさ あー 香港監獄広場

■バスに揺られて6時間 マニラの北の山の村 バギオ バギオ イチゴ畑よ

不法滞在5年と余月 たとえ 牢(ろう)でも いればばいいさ

おまえと 夢を 見続けて いたいから

妻のキハノを 夢で 抱きたい

ふたりを引き裂くスタンレーの夜風よ あー 香港監獄広場

■ヤクと賭博の入り口で 悪い奴ほど生き残り 正直者が 先に散る

早くも1年 月日もすぎて 安全なのは 務所の中

脱げ出せない 戻りたくない 娑婆の風 前科一犯 この21の夏 あー 香港監獄広場

■SEREMBAN SELAMAT PAGI SAYA GOPAL

妻の手紙を待ちわびて 涙で 読み解く 夢綴り

愛(いと)し我が娘(こ)は はたちと4つ すでに 彼氏も 出来たやら

祈る妻娘の しあわせを 無情に引き裂く 白亜の高い壁

白い粉の包みと知らず 運ぶ無知を 責めてはみても 罪の誹(そし)りは逃れられずに

すでに 3年余月が過ぎて 思うは 故郷のスランバード

どこまで続く ココナツ畑 プランテーション

きっと 戻れる日を待ちながら 綴る便りも あと4年

サンタマリアの奇蹟を祈り 50の体を叱咤(した)する あー 香港監獄広場

■アイス現場を押さえられ 怒る背中の 暴れ獅子

賭場と務所との行き帰り 極道男の 定め道 娑婆に戻るは5年先

今じゃ 涙も 湧かない あー 香港監獄広場

■ **..義をみて せざるは 勇なきなり..**

Nang dumapo ang simoy ng hangin sa akin, naalala kita

ガラスサッシを叩くスコールに 聞き隠れする 涙声

「強く生きろ」とつぶやいて 今の我が身を振り返る

同じ痛みを分け合いながら 三月(みつき)の試練を乗り越えてゆく ために悔いなし 弱きを守るサムライ魂

星空に吼える スタンレーの月 あー 香港監獄広場

■ **.. El Padre dijo a su hijo " Tu tienes que andar mucho cuidado en su camino."**

El hijo dijo a su Padre " Tu tienes que andar mucho cuidado en su camino. Porque hijo anda mismo camino como Padre !!"

モンテビデオを6時間 アルゼンチンとの境町(さかいまち)サルト

尖沙咀の安ホテル カネ欲しさに飛びついて 帰国間際に押さえられ 4年の月日に妻とも別れ 残る3年 務所の中

慣れた手つきで 寝床を作り 想うはあの日の 妻の ぬくもり

ペレイラ、メデジン、リマ、メンドーサ 同じ定め 異邦人

あー 異郷で 交わす スペイン語

母国の土踏む日を ただ ただ 祈り 見上げる 三日月 スタンレーの夜 あー 香港監獄広場

■恋も悩みも なくしたら 生きる望みも消えてゆく

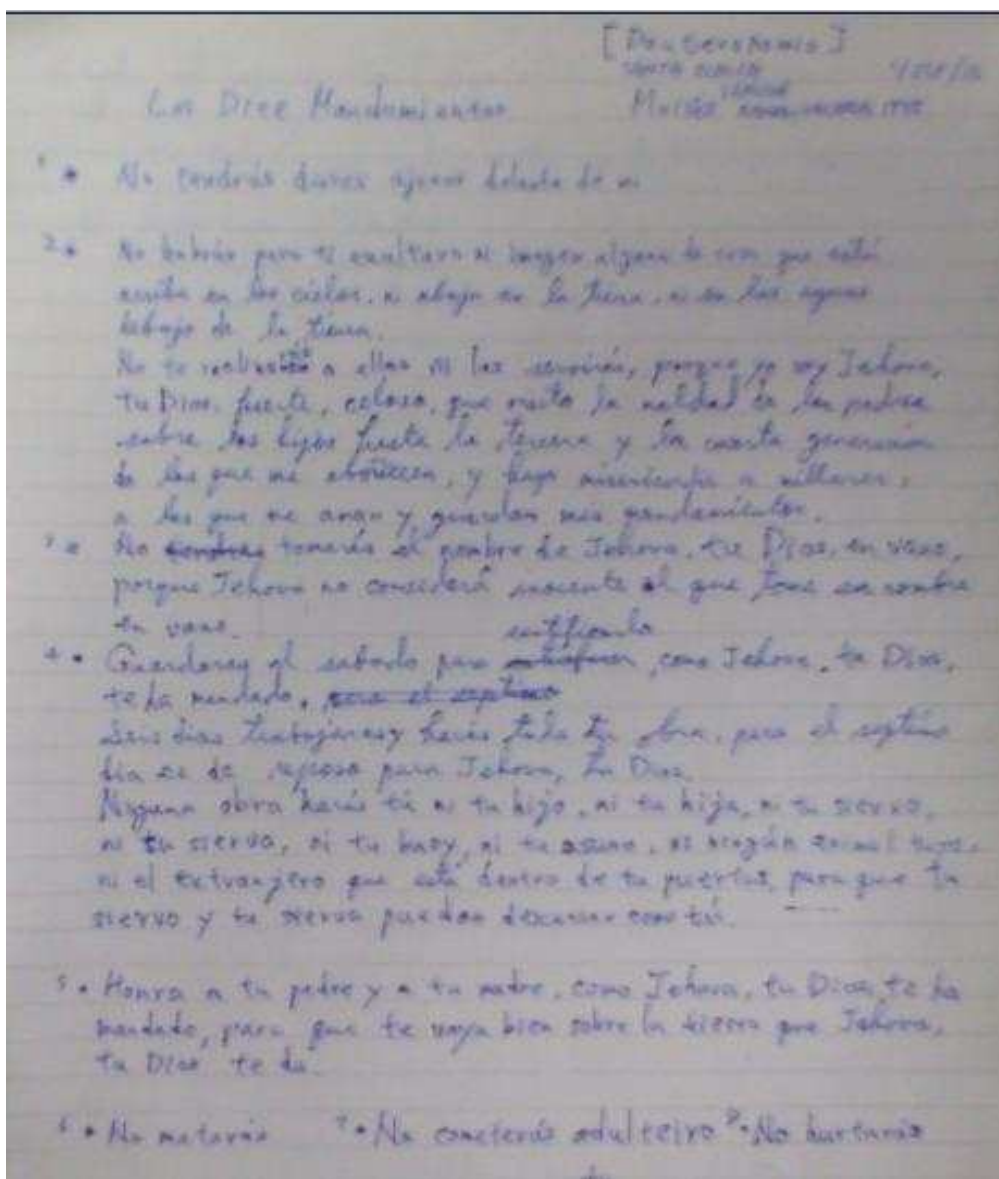
悲しみも苦しみも 肥やしに 生きる 野の花 たちよ

伸びよ 咲けよ 実を結べ

あー 風も 嵐も 雷も 己(おのれ)を試す 一里塚

強い自分を作るため 神が与えた 愛のむち

打たれて打ち勝つ 野の花ひとつ あー 我等 香港監獄広場



<<< addendum >>>

■日本の宝の若者よ 見ろよ 世界の現実を
国を守れぬ民族は 銀河のはての クズと散る
「蛍の光 と 窓の雪」カネも力も 求めずに 艱難辛苦 何者ぞ
時を惜しんで 身を 修め 強い日本を 取り戻せ
若い自由の戦士たちよ 祖国を愛するひとになれ
祖先と家族を守る 守る 強い心を 磨くのだ
「国を愛するますらお が 世界にはばたく 男なり」
さあ さあ 立ち上がれ 立ち上がれ
我等 我等 日本男児

■82 枚の日めくり暦 めくり始めて二週間 小さな一枚 長い日々

過ぎる時間は かげろうの さだめを 映す 人の河 流れて消えゆく 幻の道

会って別れる 野の花ひとつ 水の流れの速きを恨み 変わらぬ川辺を横に見て

呼べど返事(こえ)なし 日めくり暦

■82 枚の恨み節 めくり終わるは いつの日 こよし 過ぎる時間が別れを告げる

燃えて切ない ひとの さだめがわ

今日一枚 ころろを決めて 遠く消えゆく 思い出 ひとつ

もどらぬ あの日を うらみつつ 非情な流れに 身を あわす

あ一人生 日めくり暦

..**時は変われど変わらぬは 情けの川の ひとの 道**..

■82 枚の涙声 燃え立つ炎と うらはらに 終わりが近づく この悲恋川

風に打たれた野の花 無情 大地を掴んで 這い上がれ

日めくり暦が 終わる日は 次の朝日が 昇る時

伸びよ咲けよ実を結べ

三十路に入った野の花は日陰に咲いても 濃いくれないの 色は 色は 枯れない

あなたを 未練花

あ一人生 日めくり暦

■82 枚の日めくり暦 夏の知らせを 秋風に のせて 便りが届く その時は

山の景色も 色ちりじりに あかく色づく 紅葉の里よ

無邪気に遊んだ この小川 変わらぬ山河が おまえを 癒(いや)す

あ一人生 日めくり暦

風のように 水のように 自由に 旅する事が出来るなら

いろんな世界をみてみたい

北極のオーロラ サハラ砂漠の蜃気楼

カジャオの港沖のエルニーニョ ガイアナのエンジェルの滝

アタカマ砂漠の砂の川

神の創った 地上の奇跡

でも 俺たちは飛べなくなった

文明という名の 足かせが 自由を縛る

この高い監獄の白い壁のように 俺たちを 拒(こば)む

俺たちは豊かになるほど 失(うしな)ってゆく 自由闊達な ころを

縛りの中の自由 籠(かご)の中の家族のぬくもり

この鉄の監獄の檻(おり)の中みたいに

それが俺たちが求めていた自由だったのか？ ちっぽけな幸せなのか？

あー 飛び立ちたくとも 飛んでゆけない 鉄の 檻(おり)

いくら手を伸ばしても届かない 鉄の扉が 俺を 縛り付ける

作られた正義 踏み消される正直 虚構の親切

ヒトの心の叫びが 鎖で 縛られてゆく

仁義・任侠・義理人情・忠義 男の魂(たま)が消えてゆく

無感覚の冷たい鉄の格子が 人の温かさを 奪ってゆく このゾンビ世界

.....
自由を取り戻すのは 何時か？

自由の翼で 飛び立とう いつか どこかで 愛する仲間達と

さあ 心の準備を 始めるのだ

きっと来る その日を 信じて

道なかばで朽ちても 責めないでください

道なかばで朽ちても 怒らないでください

精一杯生きたのです

自分に素直に誠実に生きたのです

秋の落ち葉が川の流れてに のまれていくように

何もなかったかのように 自然はそのままでしょう

ひとの喜びと 悲しみと 汗と 涙が 地面にしみ込んで その後は 何もなかったかのように ちよつとだけ 淋しそうに

おもかげを惜しむ様に 秋風が 川面を撫でて 思い出を 消し去ってゆくのでしょう

故人も その様に 我も 同じく 風になって 消えてゆくのです

朽ちてゆくのを 嘆いては いけません 散る定めこそ 生きている今を 輝かせているのです

静かに戻りましょう 風となって 帰ってゆきましょう

新しい命が その風を受けて 育ち始めました

なんと美しい 輪廻の世界

悲しむ事はありません

あなたの60年の風は 立派に 新しい命を 残し 動き始めているでは ありませんか

すばらしい60年 あなただけの 風の世界 本当に おめでとう

そして まわりのひとたちに ありがとう ………

浮間流太郎

■ 闇夜を切り裂く一条の稲妻

60 中途の道を振り返る一かげろうの足跡 砂漠の一抹の粉粒か？

欲望に魅せられて 珠玉の富の夢に踊らされ かき消す嵐の音ぞ 空しき

虚と実の境(さかい)を徘徊し たどり着いた 茫漠たる虚実の世界

空しい虚構の街を 旅する 罪深きひと達

蜃気楼が映す 冷めた冬空の 都会の氷細工の 煌(きら)びやかさ

たどり着いたら 虚空の寒空(さむぞら) 聞こえる木枯しの 恨み声

命の灯りが またひとつ 木枯しの中に 消えてゆく

正義も 愛も みな きれいごと 信じられるものは 何ひとつない この虚構の世界

■ 闇夜を切り裂く一条の稲妻

我来た道を 語るには あまりにも 悲しい うつろな旅路よ

過去を振り返るのは やめよう 命の炎が 燃え続ける限り 前だけを見て歩こう

ひとみを大きく開いて ウソだらけの世界に 二度と だまされないように

この氷道(こおりみち)を 凍え死 しないように

■ふらりと 踏み込んだ この港町

華やかな ネオンの雅(みやび) やるせない心の淋しさを 照らす

あー 人は皆 明日への迷いを 忘れるために いつも この波止場で みえない灯りを探すのさ

空に帰るは 空に帰るは まだ はやい

このおとこ旅 ひとり道

■ひとりで また 来てしまった この港町

朝霧が 素肌を 冷たくなでる

消えたネオンに 昨日を懐(おも)い 昇る朝日に かなわぬ夢を もう一度 昨日に 戻って追い続けるのさ

あー 人の命の灯りがある限り 消えない 捨てない 振り返らない

たとえ読めない峠道でも 歩み続ける

海に戻るは 海に戻るは まだ はやい

このおとこ旅 ひとり道

■黙って俺を慰める

無口で 優しい この港町

波間を舞い飛ぶ しらとり 哀し

おのれの 定めも 知らぬ気に 流れに浮かんで また 消える

俺の命の 炎の様に 熱く燃えては 消えてゆく

先は読めない この人の 大海原よ

天に戻るは 天に戻るは まだはやい

このおとこ旅 ひとり道

■命の覚悟は出来ている

いつでも 戻るさ この港町

優しい観音菩薩の あの瞳

あー 俺を呼ぶ呼ぶ 三つ子の心のぬくもり 子守唄

..**おいどんが 死んだかて たが泣いて くりよか 裏の松山 蟬が 鳴く**..

人様の灯りになれる事もなく 仁義に 咲き散る 牡丹花

土に戻るは 土に戻るは まだ はやい

このおとこ旅 ひとり道

■「私は末吉」と佐野の大師のおみくじを 今も 大事に 心にしまい

小さな幸せ祈る私は、私はくれない くれないの ぼたんはな

運の悪さに慣れたけど そのぶん 最後に しあわせに 咲かせてよ

両手をあわせて しあわせを 祈り続ける細い白い指

お金も名誉も空蟬(うつせみ)の霞と消えゆく あだの華 天にもどれば 皆同じ

ただ ただ (沈黙) 歩き続けていたい あなたとの 夢街道

■末吉は ふたりだけの秘密です 運が外に逃げないように

あどけない言い伝え 信じて守る あー古い私は しあわせ 薄い くれない くれないの

ぼたんはな

■建て売りの小さな家でも かまわない

あなたとの 人生航路の道跡が たくさん 残る 小さなこの部屋が好き

世間の風を恐れずに 夢を求める やんちゃ坊主

いくつになっても 目が離せない 常識知らずの あばれんぼ

しあわせの神様が ふたりに微笑むのは いつのことかしら

布が 布が織れない糸車 摘んで 摘んで また 摘んで 織り続けましょうね 二人の錦が見えて
来るまで

あー古い私は しあわせ 薄い くれないの くれないの ぼたんはな

■人生航路も半ばを超えて 残る時間は 黄色信号 ちらちらと 不安が見え隠れ

日暮れ 曲がり角

庭のひだの木 15年 風雨に耐えて根を伸ばし 二階に届く幹枝も

二人の旅路を 讚える様に 深い緑が 窓辺を 飾る

見えない旅先 上り坂 死ぬまで続く 夫婦試練道

香港監獄広場 挽歌集

あー古い私は きっと きっと しあわせ つかむ 出来ない 出来ないの ぼたんはな

あ・な・た ねえ ねえ しあわせ 出来ない

..**芝居にあこがれ 役者を貫き 90過ぎても 心のどかで セリふを さがしている かつこいいおやじ でした**..

■芝居ひとつを 命と決めて いばらの道行く とげの 痛さの 心地よさ

迷う心の傷口を ぐっところえて セリフを 吟(ぎん)じれば スポットライトに 客の顔

役になりきる 役になりきる 芸道一代 芸道一代 みちのく 小劇場

■芝居ひとつに賭けて生きる 夢の道行く 変幻自在の 役者顔

蝶々の舞い飛ぶ越天楽 軽い逆立ち角兵衛獅子も 若い時代の 懐かしい

思い出舞台の いち頁(ぺいじ)

あ一時という名の 回り舞台よ

春夏秋冬 尽きない路を 頑固に 信じて追いつけ 今日も演じる 今日も演じる みちのくの

あ一夢 菊五郎

..**芝居のセリフは 自分が 役になりきるまで 何度でも何度でも 読み返せ**

役になりきれば セリフは ひとりでに 出てくる

それが おやじの 口癖でした..

■厚い緞帳(どんちょう)が 上がるその時に 生まれ変わる 役者魂

清水港の次郎長や 貫一お宮の意地男

私を捨てて 役に咲く 思いは尽きない 役者稼業

あ一時という名の 回り舞台よ 次の舞台は まだ見えないが 読めぬシナリオ 自分で書いて

おのれの色で おのれの声で おのれの命の情熱で 人生舞台を 塗り固めるのさ

尽きない夢を追いつけ 今日も演じる 今日も演じる走馬灯

あ一みちのくの 役者千両 玉三郎

■やまとのさとは くにの まほろば

水田(みずた)に稲穂が揺れる 水穂の里よ

水穂で育った この命 水穂に戻れる この誇り

永久(とわ)の大地の 贈り物

父母爺婆 その昔から 生れてつなぐ 命の山河よ

あー 母なる大地 大和の里よ ありがとう

■やまとのさとは くにの まほろば

黄金の稲穂が 波打つ 我等の 水穂の 秋よ

紅い夕焼け 稲穂が燃えて 光り輝く 命のもとよ

永久に大地よ栄えあれ 幾多の歴史の試練を越えて 生きし継がれる我が里よ

命の山河よ あー母なる大地 大和の里よ ありがとう

■やまとのうみは くにの まほろば

ニシン、サケ、タラ、マス、カニ、コンブ うみは おいらの 宝の山よ

吠える荒波 はじけるしぶき 男一匹 命を張って 網打つその先に 家の灯りが ちらちら

永久(とわ)の海原 命の糧(かて)よ 幾多の歴史の試練を越えて 生きし継がれる我が海よ

命の海よ あー母なる大海原 大和の海よ ありがとう

■ 破 破 破 我的 生命

火 火 火 我的 夢想

無論何地 無論何時 男人的路

一条直线 诚实 忍耐

熱血男人的道

■ 怒 怒 怒 不说理的社會

哭 哭 哭 金錢萬能肥胖老

無論是誰 無論是富

誰何地 無論何時 貫徹 俠意的道

一条直线 诚实 忍耐

熱血男人的道

■ 愛 愛 愛 武士的精神

守 守 守 我的愛人

無論何理 無論何難 保护愛人民 賭我的生命

一条直线 诚实 忍耐

熱血男人的道

沒 沒 沒 沒 無 無 無 無

■秋の知らせが潮騒(しおざい)に 乗って 窓辺に 届く時

妻と娘は 春風の陽炎(かげろう)舞い立つ カルタゴの浜辺 眺めて思う 父の面影

妻娘の末(すえ)のしあわせを 祈る男の 心の浅はかさ

哭いて責めてる 秋風を 恨んで遠く 瞼の中に 俺の 俺のふるさと カルタゴが 浮かぶ

■四度目の秋風がふたりの距離を 遠ざける

泣いて恨んで眠れぬ夜を いくたび 重ねた 涙の おぼろ月よ

ブロンドヘアー 風に乱れて 心も揺れて 蒼い瞳の きみを きみを また 会い見ん

燃えて叫べど届かぬ 我が心の炎よ

あ一無情に引き裂く 白亜の 白亜の 高い壁

■Espero (que) tu recuerdas

Todavía el viento oriente sigue soprando tu cabello rubio
abrazando de Siente me mi calor, una ternula eterna, iluminando su
camino impredecible.

Vuela viento cada vez mas fuerte para que te recordar aun mas !!

Mi alma siempre esta en ola playa de Cordoba conjunto mis tres
corazones, almas carinosas.

Oh dios mio, si tu esquchas mi agonía, mande mi lagrima a su garden
de mi amor.

Para que crezca una rosita de mi lagrima sangrienta, floreciendo
feliz en mis hogares.

■秋を知らせるゆっぺん(月餅)の香りに昔が蘇(よみが)える

かぐや姫の 逢う瀬の 伝えを 我が身に重ね 耐えて 待つ身 を 忍ぶ野の

荒野を照らすか 中秋の名月

伝え話は変われども 恋する心の 炎の滝は 月にも届くか 恒久の 果てぬ未練の紅い糸

あ一届け 炎よ この思い

燃えて 明るく 照らせよ わが故郷 カルタゴの 浜辺を

■表があるから裏がある そんな浮世をどっちで生きる 丁か半かのサイコロ社会
かたぎの世界を支えるために 理屈じゃ治せぬ社会の傷を 一手に抱える川下世界
絶体絶命 崖っぷちでも 三途の河原も 恐れずに 命を賭ける 我等 人生裏街道
捨てる神ありゃ 拾う神 流れの先は まだ見えないが 浮いて沈んで また浮かぶ
さだめに賭ける チンピラ稼業

■寿司も刺身も天麩羅も 夢のまた夢 務所の冷や飯 あと 五年
監獄時代を振り返り 酒の肴に 笑って話せる時が 来る日を祈って さじをとる
哭くな 嘆くな 空蝉の 舞台の中の 一コマは 所詮 男の 夢のまた夢
消えゆく灯りを惜しむより(も) 見えぬ闇夜に 目を開け
闇に仏の 闇に仏の 光が 見えて来るまで

■けなげに俺を待つ妻のたより文(ぶみ)
二人の娘も年頃で 咲くは アヤメかカキツバタ
あー俺を忘れて 掴めよ しあわせを かたぎの いい男を
すぐにも帰って 抱いてあげたい 惚れた女の いちづな心よ
百万両の 俺の あー いのちの おんな

■こんど 娑婆に もどったら かたぎの仕事に つきたいけれど
肩の菩薩と10年の務所経歴が四十(しじゅう)なかばの 四十(しじゅう)なかばの 俺を責めるのさ
お陀仏(おだぶつ)様 か お釈迦(おしゃか)様
すがる仏(ほとけ)の すがる仏(ほとけ)の 顔がみえない

■たとえ 向かい風の ひとり道でも 身を縮め 耐えて歩みを とどめずに

待てば きっと 静かな陽だまりが 見つかるよ

みんなが あきらめて もどっても 進めよう もう一步 納得出来るまで

あー 明日は明るい

信じよう きっといい事あるよ

■たとえ暑い かんかん照りの 荒野でも 手拭いで 額の汗拭き 首に巻き 帽子を深くかぶって
待てば いつか やさしい 秋の風 秋の風吹く 紅葉の 小道

あー 明日は明るい

信じよう きっといい事あるよ

■たとえ寒い氷の道でも 吐息で両手を 温めながら

きっと戻れなくなるよと 言われても 一緒に行くヒトが 少なくなっても おのれの 決めた道

これしかない道 歩き続ける 春が来るまで

あー 明日は明るい

信じよう きっといい事あるよ

■たとえ暗い闇夜の道でも 月の明かりを 頼りに 北斗星みて 南へ進む

夜明けの明かりが 見えるまで 歩みを 止めない 信じて 歩む この道 一筋

あー 明日は明るい

信じよう きっといい事あるよ

■棄(な)げたい時もあるけれど 捨てちゃいけない 男の夢を

泣いて悩んで泣き崩れ 路傍の石の お地藏さんに 両手あわせる

届かぬ望みの 一里塚

命の炎のある限り 燃えよ 炎よ 伸びて この空を 俺の炎で 燃え尽くすのさ

■くやし涙で 眠れぬ時も 捨てちゃいけない 男の夢を

唇かんで にらむ 水たまり かなわぬ昔の 夢が映る

涙で歪んだ水景色 俺の心に 俺の心に しぶきが かかる

届かぬ望みの一里塚

命の炎のある限り 我がかなわぬ思いよ 燃えよとわに しぶきに乗って あーこの海の果てまで

■酔って忘れたい 心の傷も 酔って膨らむ いとしさ 恋心

あんな女と強がりも 落ちて悲しい 酒なみだ

なぜか惹かれて なぜか惹かれて 断ち切れない さだめの 未練駒

酒の盃に おまえが映る もどれあの日の 熱い時間(とき)よ

あ一時の流れを 恨み節

戻らぬ望みの一里塚

命の灯りのある限り 燃えておまえを恋い続け 運べよ秋風 我が心の片思い

■花も嵐も踏み越えて めざせ おのれの決めた道 男の夢を

五尺の体 裸一貫 だめでもともと 捨て身のころは 武田武士

届かぬ望みの一里塚 でも

生死を賭ける つわもの ひとり

命の炎のある限り あとに引かない あとに引かない 阿修羅の 不動の たましい

■咲く桜 散る桜 同じ桜の木の枝に 生れて 開く 我等が命

夢はそれぞれ違っても お国に尽くす 義侠心

あ一桜の命の いさぎよさ こぼれるほほえみ 紅(あか)い頬(ほほ)

守れ 祖国を 我が同胞(はらから)よ 栄えあれ 永久(とわ)に

■咲く桜 散る桜 同じ桜に生まれた誇り 引き継ぐ歴史 輝く伝統

華のアジアの東の峯に 昇る旭日 地球を照らす

世界の自由と平和のために今こそ示さん 大和男児の 心意気

誰もが平和に自由を謳(うた)い 生きる喜び 愛の唄

絶えぬ命の躍動が 溢(あふ)れる 世界に 変えるのだ

あ一誇りある みずほの里に 生れた この喜び この契(ちぎり)

非情な逆風 誹り(そしり)に耐えて 貫く 我等 正義・誠の さむらい白虎隊

■咲く桜 散る桜 命の長さは違えども 気高い思いを 共に抱き

世界の悪に立ち向かう 正義の獅子の生きざまは 語り伝えて 永久(とわ)に世界に咲き続けむ

あ一我等 正義・誠のさくら白虎隊

**・・飯盛山の頂(いただき)に今吹く風は寒けれど 忠烈今も 華に 残す 華も 会津の 白虎
隊・・・**

■紺のスーツに赤いタイ 黒い革靴軽やかに はずむ 憧れの大都会よ 銀座4丁目

ニュートーキョーでの昼食も 阪急デパート屋上の アサヒビールのビアガーデンも

若い楽しい新入社員時代

ソニービルでの待ち合わせ 7時を知らせるオルゴール

同期の小野田は輸出部で テレックスのテープ作りが 終わらない

ベイルートは今年午後3時 一万台のラジカセ(の注文)が このテープ一本にかかっているのさ

..**鈴木課長 注文 決まりましたよ!!!**..

みんな 燃えてた 若かった 自分が エースと 信じてた

あー あの 熱い 燃える 燃える時代よ もう いちど!!

■VTRのサンプルを4時にもらって 7時に飛び立つ 離れ業

小さく消えゆく 成田の 灯り 雲を乗り越え 闇夜の中を 飛べば

お前の 笑顔が ブランディグラス に 映る

まだ見ぬ異国は 天国地獄 昼夜問わずの戦いに 心は躍る 心は躍る

あー カリフォルニア 地平線 朝ぼらけ

■夢のまた夢 空蝉の この世に生まれた命なら 何を恐れる ためらうか

信じる思いを 一直線に ただ 一直線に 貫け われら 新入社員時代

■月日は 巡れど 我がますらおの 命の炎は 今も なお

燃えて 南シナ海の 黄金(こがね)の波 追う 漁師船

命の荒波高けれど 波を乗り越える 波を乗り越える 男意気

尽きぬ夢追う 我等は 我等は 咲いて 咲いて 花の ナナイチ 特攻隊

■この世に男と生れたら 一度は 光りたい 男の心

たとえ路地裏赤ちょうちんの タマの灯りに 負けるとも

裸の自分の力で 光りたい

あー ウソとダマしの いつわり社会

他人の光で 光ってみせて 残る心の 残る心の 後味の悪さ

臆病心で 強がり言って 所詮 剥がれる 化けの皮

バナナの皮よりも 手が悪い

■この世に男と生れたら 一度は 光りたい 男の心

たとえ真夏の蛍の様に 細く消えゆく命でも

裸の自分の力で 光りたい

あー 形ばかりの学歴と 家柄が 決める外面(そとづら)だけの 虚構の社会

他人の手柄を横取って 威張ってみせる 茶坊主たちよ

マジで喧嘩も出来ないくせに コワって 吠えても 所詮剥がれる 化けの皮

しっぽを巻いた 負け犬の遠吠え

■この世に男と生れたら 一度は 光りたい 男の心

たとえ届かぬ 思いやりでも 誠を尽くす 我が気持ちの 心地よさ

裸電球 武骨な男の 灯りが 歪んだ社会の傷口を 照らすのさ

名もない小さな灯りでも 誇りある 野武士社会を 取り戻すまで 光り続ける タマは切れない

路地裏の 秋風に そよいで コトコト 揺れている

風に揺れながら 光ってる

裸電球 裸電球 今夜も ひとり

.. おてんとさまの おめぐみで たのしく くらす この しゃかい..

■みんな だれでも 持っている 人に言えない 心の傷を

若い時の過ち も 突然襲う 家族の不幸 も

明るい未来を信じて生きる 心の傷が あるから

ぼくらは 強くなる 僕らは 強く 生きられる

■あなたの悩みは 何ですか？ ひとりで 悩んでいませんか？

長い旅路の道端で 転んで けがする事も あるさ

転んでけがして気が付いて 心が 広くなれば ヒトの痛みが ヒトの痛みが わかる人になる

■弱い心を隠すため ヒトは社会のせいにする

かなわぬ夢が またまた 遠くなる

どんなにつらくとも 逃げちゃいけない 逃げちゃいけないよ 社会の現実から

助け合い わかりあい 励まし合えば

哀しい傷跡も 美しい 花を咲かせる あなただけの 種(たね)になる

■みんな だれでも 持っている ヒトに言えない 心の傷を

たとえ ひとりも か弱い 葦(アシ)でも みんなで 優しく 心をひらき

小さな愛(かな)しい 灯(ともしび)を つないで 大きな光に なろう

小さな愛(かな)しい 灯(ともしび)を つないで 大きな光に なろう

■最期に ひとこと ありがとう

きみが教えた 心の優しさ 心の強さ

転んでも くじけずに 恨まずに

自分を信じて たゆまずに 歩き続ける 勇気をくれた 勇気をくれた

きみに ありがとう

■最期に ひとこと ありがとう

おかねが全ての 世の中でも 同じ痛みを分かち合う 日陰の 弱い オミナエシでも

みんなで 助け合い かばい合い

きみを信じて いばらの道でも 歩き続ける 勇気をくれた 勇気をくれた

きみに ありがとう

■最期に ひとこと ありがとう

先が読めない 世の中でも ひとの 痛みを分かち合い

相手にされない 路傍の石でも 心の灯りで 照らし合えば

あしたを 信じて 闇の中でも 生きてく 道はある 道はある 勇気をくれた 勇気をくれた

きみに ありがとう